

東京大学本郷キャンパス 育徳園の変遷とその要因

中島 穰¹・中井 祐²・内藤 廣³

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:nakashima@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

³非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:naito@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

東京大学本郷キャンパスには江戸時代の大名庭園の遺構である育徳園が現存する。明治政府による欧化政策やキャンパスの狭隘化があったにもかかわらず、その園池である心字池（三四郎池）が失われることが無かった。本研究では、東京大学成立以降の育徳園の変遷を、ほぼ毎年のキャンパス平面図から整理し、その要因について、主たるキャンパス計画関係者にまつわる文献をもとに論じた。本研究において、育徳園における回遊式庭園の要素である築山、氷室、御亭は明治以降徐々に失われ、明治後期から大正初期にかけて消滅したことが、池の保存には、各時代のキャンパス計画者にとっての日本庭園の要素として扱われたことが影響しているということが明らかになった。

キーワード: キャンパス, 大名庭園, 東京大学, 育徳園

1. はじめに

(1) 背景

東京大学（以下、東大）本郷キャンパスが加賀藩前田家の大名屋敷の跡地をその敷地の一部としていることは、赤門の存在によってよく知られている。キャンパスの中央を占める三四郎池とその周辺一帯も、赤門同様江戸時代の遺構であり、育徳園と名付けられた大名庭園であった。

現在、東大では、本郷キャンパスの再開発計画において、歴史的環境の継承を目標としており、こういった歴史的環境の保存や利活用が求められている。しかし、東大キャンパス内の歴史的資産の保存に関する過去の取り組みなどを詳しく扱った研究は少ない。

東大のキャンパスを扱った既往研究としては、寺崎昌男「キャンパスと校地」¹⁾がある。東大のキャンパス用地選定の経緯や、関東大震災後の校地移転問題について詳細に述べられている。

また、本郷キャンパスについては岸田省吾による「東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関する研究」²⁾、西村公宏「明治期、大正前期における東京帝国大学本郷キャンパスの外構整備について」³⁾がある。前者は東大

本郷キャンパスおよび欧米大学の7地区の形成過程を、オープンスペースの編成形式の観点から分析している。また後者は関東大震災前の東京（帝国）大学本郷キャンパスについて、その外構整備の特色を、関係文書に見られる関係者と外構のかかわりから考察したものである。

しかし、江戸時代の遺構が文明開化の時代を生き延び、関東大震災やキャンパス内の建て詰まりにあっても失われなかった背景は、これまで明らかになっていない。

(2) 対象地, 目的, 手法

本研究は、対象を本郷キャンパスの中心に位置し、現在は「三四郎池」という呼び名で親しまれている池とその周囲の歩行空間を含む「育徳園」に絞った。その明治以降の施設配置がどのようにして変遷していったのかを明らかにすることを第一の目的とし、その上で育徳園という庭園空間が文明開化の時代を生き延び、関東大震災やキャンパス内の建て詰まりにあっても失われなかった要因について考察した。

研究には一次史料として、東大開校以降ほぼ毎年存在するキャンパス平面図を用い、その年代毎の変化を整理した。これと併せて、写真や文献などの二次史料から、育徳園の変化及び保存の要因を考察した。

表-1 育徳園の変化とキャンパス計画者に関する年表

和暦	西暦	計画関係者(役職)	育徳園内及びその周辺の変化	東大関係事項
明治4	1871			藩邸跡文部省用地化
明治7	1874			東京医学学校本郷移転
明治9	1876			東京大学設立
明治10	1877	コンドル (工部大学校教師)		コンドル来日
明治16	1883	コンドル (工部大学校教師)		コンドル東大計画発表 ("The builder"誌)
明治21	1888	コンドル (帝国大学工科大学講師)		コンドル東大辞職
明治26	1893	濱尾新(総長)	山上に集会所設置 北部に学生控所設置	医学部、医院位置入替決定 正門一帯の統一的整備
明治32	1899		水路、榮螺山の消滅	
明治39	1906	濱尾新(総長)	北東部に道場設置	
明治40	1907	濱尾新(総長)	南東の苑路整備	
明治41	1908	濱尾新(総長)	三四郎連載	
明治44	1911	濱尾新(総長)	会議所増築と北通路の拡大 東部苑路整備	
明治45	1912	濱尾新(総長)	南から西にかけての苑路整備	
大正12	1923	内田祥三(営繕課長)	山上御殿、学生控所焼失	関東大震災
大正13	1924	内田祥三(営繕課長)	バラック造りの会議所設置 仮設学生用施設設置	
昭和3	1928	内田祥三(営繕課長)	図書館前庭整備 園内の大規模な整備	
昭和9	1934	内田祥三 (建築学科教室主任)	濱尾新像設置(1933)	
昭和10	1935	内田祥三 (建築学科教室主任)	弓術場設置	
昭和12	1937	内田祥三 (建築学科教室主任)	七徳堂設置、池北東に飛び石	日中間戦
昭和13	1938	内田祥三(評議員)	柔剣道場取り壊し	国家総動員法
昭和20	1945	内田祥三(総長)		日本敗戦

2. 育徳園の施設と機能の変遷

(1) 本郷キャンパス創成期(明治9年-明治21年)

現在の東大本郷キャンパスの敷地の大半は、加賀藩前田家が将軍から与えられた拝領屋敷地である。この加賀藩本郷邸に1629(寛永6)年の徳川秀忠・家光が来邸した際に修造され、その後1655(明暦元)年には庭園の修築がなされたとされる。¹⁾ 当時の庭園内は、大名庭園に多くみられる、回遊式庭園の特徴を満たす構造であり、泉水(心字池)、つき山(榮螺山)、四阿(からかさ亭など)の存在が史料²⁾から確認できる。育徳園の基本的な形態はこの時点でほぼ整えられたと考えられる(図-1)。

しかし、1853(嘉永6)年のペリーの浦賀沖来航に伴い、江戸城下や江戸湾警護による藩財政の圧迫、参勤交代の緩和による本郷邸利用頻度の低下などから、庭園の管理状態が悪化した。さらに明治維新後、加賀藩本郷邸は官有地化され、育徳園を含む区域は1871年に文部省用地として接收されたが、それ以降しばらくの間はほとんど手入れされず、荒れるまま、雑草が生い茂り、枯れ枝が多く転がっていたという。^{5) 6)}



図-1 幕末期(1840~1845頃)の育徳園周辺図³⁾



図-2 1880年頃の育徳園周辺図⁴⁾

a) 育徳園とその周辺の変化

将軍への氷献上のための施設である氷室、庭園の眺望及び休憩ポイントであった御亭がその役目を終え失われた。この時点で回遊式庭園としての要素が失われつつあった。また、大々的な庭園内の改修や利用が行われていなかったということも確かめられる(図-2)。

b) キャンパス計画者の動向(J.コンドル)

1886(明治19)年のキャンパス平面図に見られる、育徳園西の法科・文科大学校舎は、イギリス・ロンドン出身の建築家で、工部大学校で教鞭をふるったジョサイア・コンドルの設計によるものである。彼は1877年に来日し、キャンパス全体を描いた「東京大学建物配置案」⁷⁾と称するキャンパス計画を残している。実際に建てられた施設群は配置案通りとはいかなかったものの、以降

のキャンパス内施設配置に大きな影響を与えたと考えられる。

また、コンドルは日本趣味でも知られ、外国人による最初の日本庭園研究の本格書「LANDSCAPE GARDENING IN JAPAN」(1893)を刊行しており、日本庭園への畏敬の念から育徳園に手を加えなかったものと考えられる。



図-3 1886年の育徳園周辺図 4)に筆者加筆

(2) コンドル退任から関東大震災まで (明治21年-大正12年)

1877 (明治10) 年の東京大学誕生以降、医学部に続き、法・文・理・工学部の移転をもって、東京大学 (1886年から帝国大学, 1897年から東京帝国大学) の原型が形成された。この後、キャンパスには次々と校舎など大学施設が立ち並び、明治30年代後半には建て詰まりが始まり、狭隘の度合いが増した。

1895 (明治28) 年には正門一帯が整備され、街路に面した領域では整然とした景観が見られるようになる。

しかし一方で、街路に面さない裏の領域では、次々と施設が建造された。特に医院との敷地入れ替えで育徳園付近に移転した医科大学では、衛生・生理・医化学・薬物教室が中央に講堂を共有する一群の建築が裏のスペースを占め、赤門を移動させるまでに至った (図-4)。⁸⁾



図-4 1907年のキャンパス施設配置図 4)に筆者加筆

a) 育徳園周辺の変容

池の東部に御殿 (山上会議所), 北部に第一学生控所が建てられるなど、庭園空間内に施設が建ち始めた。次に池の西部, サザエ山が削られ, その土で池から流れ出ていた水路が埋められた。また, その後新たな苑路が整備され, この時期に回遊式庭の特徴はほぼ失われたと言える (図-5)。

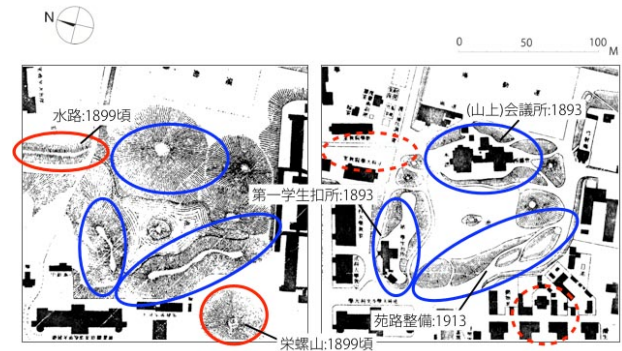


図-5 1892-1893年 (左) と1913-1914年 (右) の育徳園周辺図の比較 4)に筆者加筆

b) キャンパス計画者の動向 (濱尾新)

第3, 8代の東大総長 (1893-1897年, 1905-1912年) を務め, 正門一帯の整備, 安田講堂の配置決定, 銀杏並木の整備などを行った濱尾新は, その功績から土木総長と呼ばれた。⁹⁾

「只濱尾道路と言はれる位に, 大學内の道路を善くしたり, 樹木を能く植ゑ込んだり, 庭園を能く手を入れる人 (中略) 庭園などには餘程興味があつて, 今日東京大學の正門真直ぐの途に銀杏樹をうえたのだのも皆濱尾さんのやつた事だ」¹⁰⁾

「池をさらひ, 周りに路を作り石を据ゑたのも学生をなるべく散歩にも外にも出さぬ總長の心くばりがあつたのだ」¹¹⁾

「濱尾さんは植樹が好きで日曜日などよく一人で来られてこの附近 (育徳園) の植込への指圖をしたものです」¹²⁾ 上記のような言説が残されており, 自身の日本趣味¹³⁾ を発揮し, 濱尾新にとっての日本庭園を作り上げたと考えられる。

(3) 震災復興から敗戦まで (大正12年-昭和20年)

1923 (大正12) 年9月1日の関東大震災は, 本郷キャンパスに甚大な被害を与えた。キャンパス内の被害及び復興の様子については, 多くの文献によって明らかにされている。¹⁴⁾

地震の発生により医学部校舎, 工学部校舎の薬品棚倒壊が引き起こされ, 火災が広がったため, 焼失した建物は医学部校舎の近くに位置する育徳園の周辺に集中した。育徳園内の第一学生控所, 本部会議所 (山上会議所) も焼失した。¹⁵⁾

a) 育徳園周辺の変容

震災復興後、配置図上の苑路は大きく変わり、細かく描かれた。育徳園西には図書館の建設に際して藤棚（パビリオン）が設置されている。また、図書館の周囲の街路によって、庭園と施設領域の境界が明確になった。（図-5）

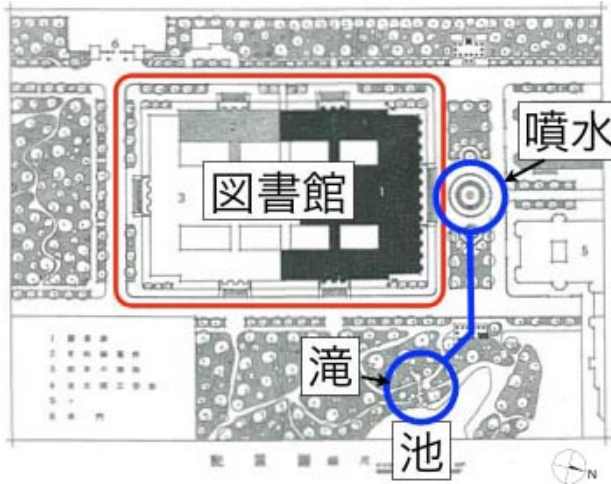


図-5 図書館完成時（1928年）の育徳園西側図¹⁶⁾に筆者加筆

b) キャンパス計画者の動向（内田祥三）

震災後2ヶ月の間に、内田祥三は3つのキャンパス全体計画案を立案した。¹⁷⁾ 育徳園内については3つの案いずれもほぼ同じ平面図を描いている。その計画から育徳園の周囲には広幅員の道路を配置し、庭園と周囲との境界を明確化している。

復興の基本方針として、火災による被害を最小限とするために建物の周りに広い空地を作ること、そして建築物のデザインと高さの統一、諸施設の配置を秩序立てることが挙げられる。¹⁸⁾ 震災時、三四郎池を取り囲む建物に次々と火が付き、三四郎池東丘上へと拡大していったとされるが、当時の被害状況から、火災は運動場や育徳園に遮られるように鎮火していること、三四郎池の池水が消火用水として利用された¹⁹⁾ ことから、復興計画を策定する中において、三四郎池の防災の観点から、保全されたと考えることができる。ゆえに、この育徳園を取巻く道路の配置・設計にも火災による延焼の防止が意図されたことがわかる。

また、育徳園内部については、図書館前庭の噴水を池に落とすための滝や、苑路、御亭の整備を行っている。よって、内田がゴシック風建築や軸線を基本とした街路に象徴されるキャンパス整備を行う中で、育徳園は日本的な空間として保っておくべきと捉えられていたものと考察できる。

3. 結論

(1) 成果

本研究の成果は以下の3つである。

- ・明治以降の育徳園の変遷過程を把握したこと。
- ・江戸時代から残されてきたものは池と小島のみであるということを明らかにした。
- ・育徳園はそれぞれ、J. コンドルにとっては日本文化の研究対象であり、濱尾新にとっては趣味の対象、内田祥三にとっては防災の一拠点かつキャンパスに必要な日本的な空間の一つであったことを明らかにした。

(2) 今後の課題

まず、育徳園内の空間の変遷を追うために生態系の変遷を調査する必要がある。

また、キャンパス計画者の考えが、育徳園の変遷に大きな役割を果たしていたことから、同じく構内に残る遺構である赤門についての調査比較が必要であろう。

参考文献

- 1) 寺崎昌男：東京大学の歴史，pp.26-46，2007
- 2) 岸田省吾：「東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関する研究」，東京大学学位論文，1997
- 3) 西村公宏「明治期，大正前期における東京帝国大学本郷キャンパスの外構整備について」，『平成9年度 日本造園学会研究発表論文集（15）』，pp.431-436，1997
- 4) 近藤磐雄：加賀松雲公，上巻，pp.223-232，1909
- 5) 前田育徳会，前田家編集部：加賀藩史料，第二編，p.928，1930
- 6) 江戸御上屋敷絵図，1840
- 7) 東京大学キャンパス施設配置図，1880-1991
- 8) E.S. モース，石川欣一：日本その日その日（1），p.15，1971
- 9) E.S. モース，石川欣一：日本その日その日（2），p.90，1971
- 10) 造家學會：ジョサイア・コンドル博士表彰 コンドル博士の経歴，建築雑誌，402号，p.63
- 11) 東京大学医学部：東京大学医学部百年史，p.343，1967
- 12) 東京大学本郷キャンパス内濱尾新像の解説碑から引用
- 13) 佐々醒雪，和田垣謙三，濱尾總長と菊池總長，中央公論，pp.166-168，1910
- 14) 帝國大學新聞，1925（大正14）年9月28日
- 15) 帝國大學新聞，1926（大正15）年12月6日
- 16) 藤尾直史：旧東京医学校本館（現小石川分館）の保全と活用，Ouroboros 東京大学総合研究博物館ニュース，Volume6 Number3，2002
- 17) 「東京帝国大学構内及ビ附属航空研究所火災報告」（大正12年11月）「東京帝国大学構内震災類焼被害木調査復旧保護手入並ニ被害樹木伐採」（大正12年），「東京帝国大學五十年史 下冊」，「東京大學百年史 通史二」，「東京大学医学部百年史」，「本郷區史」など多数。
- 18) 東京大学医学部：東京大学医学部百年史，p.700，1967
- 19) 東京帝国大学東京帝國大學附屬圖書館復興帖 1930
- 20) 岸田省吾：東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関する研究，1997
- 21) 「東京大学百年史 通史2」 p.409
- 22) 本郷區役所編輯：本郷區史，1937